

短 報

介護サービスにおける設備や機器の重要性 —入浴介助の変遷から—

旭川敬老園*

村上 智亮・山本 正勝
 打田 恵子・寺西 明子
 森 繁樹

キーワード ユニットケア 個別ケア 入浴形態
 機器・設備

1. はじめに

旭川敬老園ではH16年半分の改築、H17年全面改築を経て、3種類の個浴を使用する入浴形態となり、H23年7月にはチェアインバスを導入した。これにより計4種類の入浴形態の中から、利用者の状態や本人からの希望等を踏まえ、本人に合った入浴を提供している。

しかし、改築以前にも大浴場の一般浴、座位式特殊浴装置、特殊機械浴槽（以下「特浴」という）の3種類の入浴形態があった。だが、提供している入浴サービスについては、支援の方法や職員意識についても、現在とは違うものであったと思われる。

設備や機器の充実を行うことで、旭川敬老園における入浴環境の改善がどのように変化したか、その変遷をたどり、介護のあり方との関係について考察していきたい。

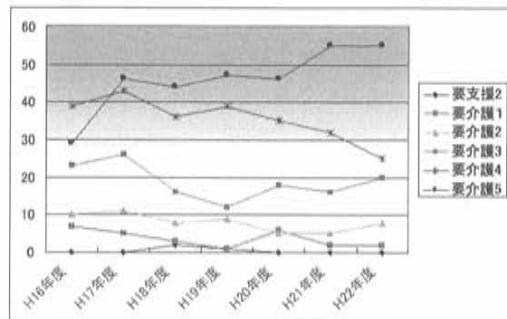
2. 旭川敬老園の現状

旭川敬老園は定員110名、平均年齢は85歳3ヶ月、平均在籍期間4年9ヶ月、利用者全体の平均要介護度は4.1となっている。

社会福祉法人旭川荘（理事長 末光 茂博士）

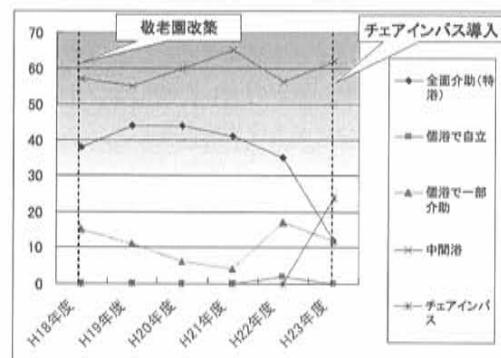
*特別養護老人ホーム

図1



入居する利用者は、図1の要介護度別入居者の状況で示すように、要介護5の利用者が年々増加しており、要介護4以下の利用者は減少傾向にある。

図2



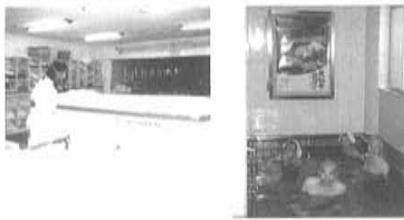
3. 建替え以前の旧旭川敬老園における入浴の状況

旧旭川敬老園では居室から離れた場所に浴室が用意されており、一般浴については、大浴場を使用しての集団での入浴が行われていた。大浴場には座位式特殊浴装置が設置されていたが、一斉に行われる入浴介助の時間内では、この入浴形態が使える利用者にも限界があった。また、特浴も作業的に行われ、入浴する利用者が入浴を楽しむことは難しい状態であった。

入浴介助の方法について、ずいぶんと以前の旭川敬老園では、職員の役割（居室の送迎・入浴介助・着替え）をしっかりと分けた分業方式をとっていた。だが、作業的な入浴介助を改善するため、平成15年前後から、一人の利用者に対して職員が各過程を一

貫して行う、個別対応へと変更している。しかし、大浴場と特浴しかない状態の中では、こうした形での改善にも限界があった。

写真1 旧敬老園における入浴の様子



4. 設備の充実に伴う、利用者・職員の変化

設備の不十分な施設での入浴環境下では、職員は限られた時間の中で、多数の入浴を行う必要がある。そのため、より効率的な入浴を優先する傾向があり、そのため利用者と関わる時間も少なく、多数の利用者の状態を把握することは困難な状態であったのではないかと思われる。

建替え後の旭川敬老園では新たに座位式特殊浴槽（以下「リフト浴」という）の導入を行い、入浴形態の充実を図ることにした。そのため、より重症の利用者が使用する特浴での入浴者数は減少し、個浴での一般浴やリフト浴による入浴形態に置き替わっている。

建替え以前の旧旭川敬老園と比較し、現在の旭川敬老園では、入浴環境は大きく改善した。普段から関わりを持つ職員に介助を受けることで、安心して入浴してもらうことができ、個浴を実践することでプライバシーにも配慮した介護環境に変化した。また、職員一人当たりが関わる利用者数も減り、より利用者の状態を把握しやすくなったり。さらに、平成23年度からはチェアインバスを導入し、現在では4種類の浴槽が準備されたこともあり、より利用者の状態にあった浴槽を使用できる環境になった（図2）。

旭川敬老園で使用している4種類の入浴形態については、全入浴形態とも個浴を実践している。入浴介助を行う職員は、ユニット内の職員で行われてお

り、馴染みの関係にある職員と、介助は一対一の関わりを持てるようになっている。この対応により利用者に安心して入浴してもらえる他、対応する職員は関わりが増えると併に、責任を持ち入浴介助を行っている。

5. 現在における入浴の具体的状況



写真2 『一般浴』

写真3 『リフト浴』

一般浴はユニット内に設置され、手すりを利用して、立位や歩行、浴槽を跨ぐことができる利用者が使用している（写真2）。

リフト浴は、歩行や立位、浴槽を跨ぐことが難しくなり、一般浴槽の利用が困難な利用者が使用している（写真3）。利用者の多くはこの一般浴かリフト浴を利用し、日常の生活場面の中で入浴を行えるようしている。



写真4 『特浴』

写真5 『チェアインバス』

特浴は骨折や表皮剥離リスクが高い等、利用が困難な利用者が使用している（写真4）。旧旭川敬老園では利用者の多くがこの特浴を使用していた。

本年度導入されたチェアインバスは、一般浴槽、リフト浴を利用できない利用者が使用している（写真5）。チェアインバスは専用の椅子に移乗を行い、入浴を行う。また、旭川敬老園では浴室に天井走行リフトを設置することで、より介護を必要とする利用者でも入浴できるように工夫を行っている。さらに、チェアインバスと特浴については2人介助を行

うなど、機器の操作や安全確保を行い易くする工夫もしている。

なお、チェアインバス導入に伴う職員への効果については、

- ・入浴介助が作業的にならない。
- ・利用者の目線が介護者と合う高さで、コミュニケーションがとりやすくなった。
- ・リフトを使用することで介護者の負担も軽減し、介護者に余裕が生まれ、利用者と関わる密度が増えた。

等の効果が挙げられている。

また、利用者への効果については、

- ・入退浴時における、入浴者のプライバシー保護がこれまで以上に可能となった。
- ・特浴時には真上（天井）しか見えないが、座位をとる事により、周りが見渡すことができ、安心できる（職員による実体験）。
- ・座位で入浴を行うため、自然な姿勢で入浴を行えるようになった。

等が考えられる。

今年、旭川敬老園の介護サービス提供の指針では、

- ①寝たきりから離床へ
 - ②車椅子から普通の椅子、テーブルへ
 - ③紙下着（紙オムツ）から普通の下着（布パンツ）へ
 - ④経管栄養から経口摂取へ、ミキサー食から固形食へ
 - ⑤受身がちの生活から、意欲を持った主体的な生活へ
- と以上の事を掲げている。

しかし、利用者の生活能力を引き出すためには、理念や指針で職員へ周知徹底を行う以外に、設備や機器の充実といった介護環境を整えていくことも重要であると改めて理解できた。

6. 考察

旧旭川敬老園では、利用者が生活する場所とは違う所に大浴場やトイレ等の重要な介護資源があった。その結果、職員のシフトが業務中心となり、作業優先の環境になりがちになってしまっていたのではないかだろうか。また、そのため細かな点に気づき難く、事故やヒヤリハットも起き易くなっていた面もあったと考えられる。

そうした環境の中では、要介護状態にある利用者

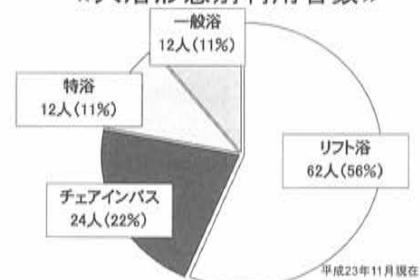
にとっても、ゆっくりと入浴を楽しむことは難しかったのではないかと考える。さらに、旧旭川敬老園の建物その物を考えても、そもそも風呂場の数やトイレの数が少なかったという現実もあった。以上のことから、利用者の状態や希望に沿った個別ケアを実践していくためには、必要な設備や機器が不可欠であるということがわかる。

とはいっても、環境の整備により、利用者に合った入浴が行い易くなるが、ただしそれを使用する職員側の働き方の工夫や意識改革も同時に必要である。現在、旭川敬老園では環境整備や職員研修の実施を積極的に行い、入浴形態としては一般浴12名、リフト浴64名、チェアインバス24名、特浴12名という利用状況となっている。（図3）

要介護5と要介護4の利用者が約73%を占める中では、旧旭川敬老園以上に介護を必要とする状況である。しかし、入浴環境の整備により、多くの利用者が、生活を送る空間から切り離されることなく、生活の中の1シーンとしての入浴ができるよう生活環境そのものが改善されたことはユニットケアの意義だといえよう。

図3

《入浴形態別利用者数》



7. まとめ

特別養護老人ホームでは最重度の要介護も多いため、ユニット内の対応だけでは限界もあり、園全体で使える介護機器やスペース等についても有効に活用していく方が、介護の質を上げることができる面もある。事実、グループホームや有料老人ホームで対応困難となった重度の要介護者の新規入居はめず

らしいことではない。このことからも、利用者の生活を支える機器や設備には、ユニット内で完結するものと、園全体で活用する機器等のバランスが必要であることがわかる。

現在の旭川敬老園は、全体で15ユニットであり、入居者110名、ショート10名が利用する。15の介護単位を75名の介護職員で運営することは、実は旧来型の大型施設よりも職員管理やサービスの質の管理において難しい面もあるのではないか。

そのため、より良い介護サービスを提供していくには、

- 1 生活リハビリの観点から、日常の生活で、職員が継続して行える動作を繰り返していくこと。
 - 2 職員教育を通じて職員の業務に対する意識の向上を図り、利用者のできることに着眼し、できないところを補助していく、支援の手間を惜しまないこと。
 - 3 アセスメントやモニタリングの充実を図り、利用者にとって本当に必要な介護は何か？、必要以上の介護を行っていないか見直していくこと。
- 以上のことを行っていきたい見直していくこと。
- 以上のことを行っていきたい見直していくこと。

8. 今後の課題

今後の課題として、施設内の機器や設備も大切であるが、それを使う職員の働き方の工夫も大切であることが挙げられる。現在の旭川敬老園では、利用者に合わせたサービスの提供が行えるよう、入浴設備以外でも日常生活全体の環境整備を行い、利用者の各状態に合わせたトイレや、低床ベッド、椅子や机、ソファーや昇降リフトなどの介護機器や家具の充実を図ってきており、しかし、ユニットケアでは利用者の生活を中心にして、仕事のしやすさと利用者の暮らしやすさのバランスを常に考えていく必要があり、そのバランスが崩れれば、すぐに『作業優先』となってしまいがちなのが現実である。

また以上の事を踏まえ、職員は現在の状況を当たり前と捉えず、これまでの変遷の歴史を共有し、絶えず介護のあり方についての見直しを行っていくことも必要であるといえるだろう。